

# 文芸

## 俳句

夢の世の街を行くなり花辛夷 池田 逸子  
 訪ふことの無き国よりの黄砂降る 伊藤 敬子  
 春雷や聞こえぬ耳を塞ぐ母 今関満喜子  
 よらよらの子に握られし土筆かな 魚地 照子  
 夢いくつ思ひ出いくつ花衣 江森 悦子  
 四月馬鹿騙され通す好好爺 大谷 武彦  
 亀鳴くや成田山池銭の浮く 川島 孝夫  
 挨拶はチエン一声燕来る 川島 通則  
 春早々侍ジャパン国湧かす 桑名 大行  
 連翹の黄色く揺るる庭明り 向後 寛  
 鶯や山家の奢り昼の月 越川せつ子  
 花摘みや心潤す房州路 小松 藤男  
 早春や安房は天まで花の海 佐瀬 輝夫  
 大ぶりの河津桜の居間となり 宍倉 道子

繕ひし畦滑かに風光る 鈴木とし子  
 ふらここや背を押す母は今はなく 玉虫 栗扇  
 芽吹く木々映して揺れる水面かな 土屋 義昭  
 法民の古きオルガン柳の芽 戸村 静葦  
 菜の花の満開に咲く里静か 長谷川正子  
 咲きみらる少し前よし桜花 早川 勇  
 手品師の扇に舞ふや紙白蝶 山口 一秋  
 ぶらんこにゆれて読書の小半刻 山口 とし  
 春曙白き部屋より棺出る 渡部 和秋  
 読みあぐるお経の意味は解らねど 心清しくなりてゆくなり 吉岡 信子  
 片栗の花見むと吾家訪ひくれし 歌の友達長く病み臥す 青木 秀子  
 莢豆の蔓は微かな風に揺れ 絡みゆく先探しぬるなり 押尾 輝子  
 明日の晴約束するがに満月が 弥生の空に輝きみたり 西山満里子  
 白蓮と辛夷の花が咲き揃ひ 吾家の庭に春を告げぬつ 鈴木まさ子  
 いづもより家事と早めに取りあげて WBCの放映を待つ 八角 三枝  
 鶯の初音の声に励まされ 徹さくさくと追みゆくなり 平川 芳子  
 母逝きて残されし父の寂しさが 独りとなりし今なら解る 選者 斎藤つね子  
 池田 春江  
 根と張りて自在に生ふる庭の草 われも腰据え力込めゆく 佐瀬 初音  
 芥と摘む靴の底ひに浸みて来る 枯田の氷のはつか温とし 芹川 初子  
 留守として帰りし吾が家猫の子は 甘えし声で擦り寄りてきぬ 田崎 尚実  
 桃の花蕾ふくらみ咲はじむ 我が家の春は桃で始まる 鈴木 益郎  
 メタボには動作楽なるもんべ 穿くも昭和の戦時下胸に突きあぐ 安田 和子  
 吹く風の肌冷たく触れつ、も 樹木は微かに春を粧う 伊藤 定男

## 短歌

## こうほう博物館 14

### お墓から出てきた石斧

町には、町民から寄贈された文化財が、多数保管されています。それらの文化財の中に、大昔の石斧があります。

その石斧は、今から十七年前に、古屋地区の薬王院福秀寺の裏手にある墓地を掘り返した時、深さ一mほどから出土したもので、その折に関係した近所の方が町へ寄贈しました。長さが一〇cm、幅が四cm、重さが三七四gあり、橄欖岩という重い石で作られています。柄を付ける元が細く、刃の部分が最も

のような形の特徴から、縄文時代中期の石器であると推定されます。刃こぼれが少しありますが、ほぼ完全な形であるところから、単に捨てられたものとは考えられませんし、また、一mもの深さから出土したので、最近誰かが埋めたし、この石斧が出土したことから、四千年前の縄文時代中期に、古屋地区のあたりはすでに、人々が行き来できる陸地であったことは、確かのようなのです。



幅広い乳棒状石斧という形で、角を有して面取りし、表面をすつて磨いた磨製石斧です。こ